

多少の修正を加へたるもの、序説には神祇史の意義、時代區分、及び各時代の特色を掲げ、第二上代に於て氏神の起源、神社成立の順序、大化改新が古來の風儀を存せし事を説き、第三外來思想との交渉には、儒佛二教及陰陽道との交渉を觀察して、神佛習合説の起因に山林抖擻の風の看過すべからざるを指摘し、第四平安朝には、此時期に代りて現はれし神、延喜の制、二十二社の發生を説き、神社の社會的發達に關してはそれが領地の廣大、神人衆徒の發生によりて社會の一勢力となり、交通機關、都市の發達に資せし事を注意し、第五鎌倉時代に於ては、武家の敬神を以て治國の要道とせし事より、承久、弘安兩役に於ける社家の活動を叙し第六室町時代にては怨靈の咎殃を恐れし思想界の傾向を記し、諸社寺の經濟上の基礎を説明し、第七織豊時代には秀吉の大社家に對する方針は其所領を收めて古來蓄積せし實力を亡失せしめんとせりと言ひ、第八鎌倉及び室町時代に於ける神道説の發達に關しては、習合説の完成と共に通俗的に布衍したる試みありしを示し兩部神道、御流神道、伊勢神道、吉田神道、法華神道等の興隆せし趨勢を講述し、從來の僧者社祇の兩派の外更に神祇を主とする傾向を生ぜりとし、第九第丁江戸時代にては、朱印地の地方分布より次で之を他に神社神祇の管理、神道説嘯起の概況を述べ、智識階級の要求に應ずべき儒家神道の外、極めて卑近なる形式の下

に發現せし修驗道、富士講、御嶽行者に注意したる等、古來の神祇に關する事項の、發生、消長、陸夷を政治上の事情と社會文化の發展の上より講説したり。本文菊版一八二頁數葉の圖版を挿入し、神事に關する諸表九、索引を添へたり。(明治書院發行、價、一、五〇)〔中村〕

●滿鮮地理歴史研究報告 第五 東京帝國大學文科大學
本書は收むる所の論文凡て五項、其の一高麗成宗朝に於ける女眞及び契丹との關係(池内宏)は章を定宗以後の北境經略と成宗の初年問題、契丹の女眞征伐、契丹の高麗入寇と鴨綠江東の所屬の確定の三段に分ちて論述し、其の二韓契丹考(箭内互)は緒言、陰山の韓契丹、與安嶺西の韓契丹、敵烈と韓契丹、阻卜と韓契丹、黑韓契丹と白韓契丹、結言の外に、附録として可敦城考を添へ、其の三北宋の對契丹防備と茶の利用(松井等)は序説、茶と唐宋の經濟界、唐宋の茶法、北宋初世の權茶法、北宋中世の稅茶法、神宗以後の茶法の各章を立て、其の利用方法を論じ、其の四遼の制度の二重体系(津田左右吉)は緒言、契丹人の部族制度、漢人の州縣制度、行宮に於ける二重体系、中央政府に於ける二重体系、南面官と契丹人の各章の外に遙輦氏及び遼室の祖先に關する傳說、耶律氏及び蕭氏、行宮の性質の附論をなす。其の五、鮮初、東北境と女眞との關係三(池内宏)は前々同よりの續稿にして茲には主として建州

左衛と楊木塔兀を論述するに努め、犛哥帖木兒の吾音會選往と其の事情、建州衛の遼猪江移轉、楊木塔兀に對する明の招諭、木塔兀の具州移居、楊木塔兀の被擄に對する明の推刷、犛哥帖木兒父子の横死の諸事情を調査したり。尙成宗朝前後西北經略圖宋對契丹の戰略地理圖を添ふ。(非賣品、東京文科大學發行)

●東洋歴史叢成 全三冊 櫻井時太郎編

從來東洋史に關する専門的研究の發表は斯道學界に多く見ても中等諸學校の東洋史教授の參考用として、將又一般的の讀物として公刊せられたるもの極めて稀なりき。本書は其の缺陷を補はむとして編纂せられたる尙大なる東洋史にして、其の記載の詳細に涉れると斯學に關する専門學者の諸説を網羅參酌せるとの點に於ては正に空前の大編纂物と謂ふべく、編者の苦心の存する所洵に賞賛に値すべきなり。全部上下中三卷に分れ、總紙數二千七百餘頁に上り、編を立つること五、章を分つこと二百二十八、節を立つること一千二百十六、上卷は三皇五帝時代に起筆して三國の世に至り、中卷は其の後を受けて唐の末世に達し、下卷は更に中華民國時代に及ぶ。其の既に發表せられたる斯學専門學者の説は殆んど網羅引用せざる無く、大体に於て古代に略し、最近に至るに従ひ、次第に詳述を加ふるもの、如し。而も我が國史と密接の關係の存する支那及び印度の上古と支那の中古とは特別の注意を拂

ひて執筆し、又我が制度風俗の基となりし支那中古の風俗、特に唐代の制度等には比較的詳述に努め、之に反して史實に於て人種間頗の如き専門學者の間に論争の種となれる問題は親切に其の異説をも列舉し、極めて公平穩健なる説の採用を試み、努めて一家言に偏するの弊を避けたる慎重の態度は之を讀む者の別して留意すべき點なるべし。要するに此の種の既刊網纂物中に於ては確に白眉たるの榮譽を荷ふべきものなれば浩翰なる支那書籍を讀破するの勞に堪へざる非専門學者に取りては好個の東洋史にして、洵に集成の名に耻ぢずと謂つべきなり。但し其の記述する所にして、時に或は吾人に解し得ざる語點無きにしもあらず、譬へば周の都せし豐邑をば豊として志し、其の誤植に非ざる証左には特に振假名を加へて之をレイと讀ましめあるが如き其の一例なり、讀者宜しく注意すべし尙附録として添へたる中等學員檢定試験史科問題集は受験者の便益に資する所益し少なからざるべし。(定價上卷三、五〇 中卷三、八〇 下卷四、〇〇 隆文館圖書株式會社發行)

●滿蒙叢書 第一卷 (口北三廳志自卷之首至卷之十三)

文學博士 內藤虎次郎輯

古來東亞の奥區として無限の富源潛藏せる滿蒙の地が、近く世界列強諸國の深き注意を注がれつゝある今日、獨り滿洲が完顔、尙羅二王朝の發祥地として、將又蒙古が匈奴突厥諸族の單于可汗

の興亡地として東洋史上に重大なる意義を有するのみならず、正に現在世界經濟戰爭上の爭奪對象地として殊に吾人日本人には看過し置くべからざるの地域なり。加之交通機關の設備は日一月と擴張せられて益々東亞の大勢に至重の關係を惹起せしめつゝあるは今更暇々の辯を要せざる所、然れば之を歷史上より研究せむとする者に於ては言ふを須ひず、之が經濟上の實力價值を調査し、我が邦勢力の發展の一端に資せむとする者にも、深く歴史的に滿蒙古今情勢推移變遷の迹を察するの必要あるべく、學理と實際と相待ちて眞の開發は始めて爲さるべきなり。水叢書は内藤博士が其の二十餘年間苦心蒐集せられたる滿蒙研究史料に就きて廣く滿蒙研究の學者、經世家の爲に編纂せらるゝものにして命じて滿蒙叢書と曰ふ。其の選定に總て博士自ら其の勞を取られ、向ふ三ヶ年を以て一期となし、毎年八冊都合廿四冊を刊行せられむとす。而して其の第一卷として本年三月公刊せられたるものには張家口、獨石口、多倫諾爾三廳地誌の專書として直隸分守口北道金志章の撰に係る口北三廳志を收めたり。口北三廳の地は清朝興隆に際し最も關係深き地にして、而も其の原本には壁蝕人を稱するに夷狄の文字を以てしたれば、清代に於て違碍の禁の嚴なるに會し、爲に其の明實錄等より引用せる部分は皆版を削りて空白とせられ、夷虜の文字は改竄せられて殆んど完本無かりき、然るに

博士多年苦心搜索の結果幸にも原本の面影を留めし汪傑卿氏年珍藏の寫本を得、之によりて刊本を校訂し得たるのみならず、明實錄等によりて其の不明の章を校補し、又引用書にして違碍の書となり刊本に其の書名の削除せられあるものも悉く其の舊に復したれば、此の書の完本は之を得て始めて觀るを得べく、吾人の深く感謝に堪へざるところなり、第一卷は本書の第十三卷迄を收められた十四卷より十六卷迄は次冊に刊行せらるゝなるべし。(非賣品滿蒙叢書刊行會發行)

●●●●● 第六集

本叢書遂に第六集を公刊するに至れるは幸慶と謂ふべし。一帙八本其の收むる所は脉畧館書日舊鈔本、唐石經考異袁入愷手寫本、唐石經考異補手寫本、冥報記唐人寫卷子本の各種にして、支那學に志ある者の看過すべからざる好座右本なるべし。(價五、〇〇)

●●●●● 中國婦女文學史 謝无量編

東洋文學の淵藪たる支那は獨に男子に司馬遷、韓退之、蘇老泉李白、杜甫の如き文星を出現せしめしのみならず、女子に於ても蔡琰、曹大家以下閨秀作家に乏しからず。本書は編者の多年經子史集に渉りて苟も婦女の文學に關係ある者は悉く其の事蹟を綴り併せて其の名作をも掲載せる便利なる編纂物なり。全編を分つゝ

と三、第一編は上古、婦女文學第二編は兩漢、魏晉南北朝、唐五代を網羅し、第三編は宋遼と元明を収む。(定價 一元四角、中華書局發行) (以上那波)

●Herbert B. Workman: the Evolution of the Monastic Ideal (Londn, 1917)

本書は遁世思想の發達を説きて初期基督教の時代より托鉢僧團成立期に及べるものなり。著者は先づモナスチズムの思想が初期基督教界に發生し來る外的並に內的因由を説き、其一般的特質を擧げ、ベネザクト派以前の原始的時代に於ける僧院制度より漸次この思想主義が發展し行ける過程を討ね、聖ベネザクト及聖フランシスの出現を二個の中心點とする該期間の推移を述べて托鉢僧團の性質に及び、最後に遁世主義の使命を論じて編を結べり。即ち本書は専らモナスチズムの興隆期を取扱へるものにして、この方面の研究に對して造詣頗る深き著者が、この種の著述に往々免れ難き哲學的思索に耽せずして飽遠史的考察の態度を失はず着實なる勞作を公にしたるは多とすべきものなるべし。其所論中には間々首肯し難き點あるべく、殊に第一章の總括的論說に對しては異論叢からざるべしと雖も、兎に角從來公刊せられたる思想上よりせる僧院研究の述作中に於ては嶄然頭角を抜けるものならん。

●Carlton J. Hayes: A Political and Social History of Modern Europe. (2vols, New York, 1916)

本書はロマンヤ Hayes 氏が彼地に於けるカンツチ教科用として纂したるものにして、第一卷は一五〇〇—一八一五年第二卷は一八一五—一九一五年の時期を取扱ひ居れり。著者は其目的に適ふやうに近代四世紀間に於ける歐洲の政治及社會的發展の經路を極めて手際よく編述し居り、殊に最近世の部分に力を注ぎ其分量も全篇の半ばを占め居り、出來榮えも亦他の部分よりも優り居るが如し。第一卷中に纏められたる前代三世紀間の記事はこれに對比して確に遜色あるべく、間々精到を欠ける箇所聽しとせず。而も大体に於て巧妙なる其編述方法は篇中挿入の參考地圖各章末に附せる參考書目及精密なる索引と相俟つて歐洲近世史學修者の良好なる參考書として推奨すべきものなり。(以上植村)

●海峽殖民地概覽 外務省通商局編

海峽殖民地(馬來聯邦を含む)につきて、其政治、人種、人口、産業、宗教、交通等を述べたり、統計的の處多けれども此地方のことと記したる邦文のものとしては、唯一の參考書たるべし、就中人種宗教、經濟等の記事最も見るべし。(價二、八〇 啓成社發行)